週刊ポスト '17.12.22号

この人に訊け！

平山周吉【雑文家】

陸軍中野学校
「秘密工作員」養成機関の実像

山本武利 著

筑摩書房　1700円＋税
装丁／神田昇和

天皇制の是非まで許される自由な議論が歓迎された空間

謎に包まれた諜報機関「陸軍中野学校」の紛れもない、本格的な歴史書の出現である。「中野」といえば、ルバング島から生還した小野田寛郎元少尉の帝国軍人そのものといった直立不動の姿勢と、市川雷蔵映画のハードボイルドで端正な風貌を思い出す。そんな虚実とりまぜたイメージの予断を排し、たった七年間の歴史を闇の中から発掘している。

中野学校は同時代には存在そのものが秘匿されていた。隣の敷地にあった憲兵学校出身者もその存在に気づかなかった。講義内容をノートにとることも歓迎されず、教科書は返却する必要があった。徹底した秘密主義である。学生たちは髪を伸ばし、背広とネクタイを支給された。全陸軍から選抜され、「透明人間」として生きねばならない。勲章もなく、靖国に祀られることも望めないエリート集団であった。

中野の教育方針は戦局などで変更を余儀なくされるが、根本にあるのは、単独行動に耐えうる知性と判断力の育成だったといっていい。命令一下、死ぬことを義務づけられた軍人たちとは正反対である。自由な議論が歓迎され、降伏か玉砕かを論じ、天皇制の是非までフリートーキングだった。その一方で、「国体学」が重視されていた。特殊な教育空間から二千数百人が巣立っていった。

敗戦とともに書類は焼却され、卒業生たちの記憶は密封された。著者の山本武利はインテリジェンス研究の第一人者である。国内外の史料を探し出し、生存者に取材し、無名者たちの辛酸の歴史を復元している。

「中野」に一番注目したのがソ連であり、アメリカは占領一年後に学校の存在に遅ればせながら気づく。皮肉な話である。それ以上に皮肉なのは、昭和天皇の「御言葉」が「中野」の自由な言論を委縮させたことだった。著者は『昭和天皇実録』の小さな記事を手がかりに、その皮肉に接近していく。そこからは上下ともども、アジアを軽視した帝国日本像が炙り出されていく。

嵐山光三郎【作家】

俳句でつくる小説工房

堀本裕樹 田丸雅智 著

双葉社　1400円＋税
装丁／鈴木 徹(THROB)
装画／高橋由季

読者の詠んだ俳句を分解再構築してショートショートに

俳句とショートショートのコラボレーションが楽しい一冊。小説家は俳句がヘタクソで、そこが韻文と散文が決定的に違うところなのだが、俳句に触発されてショートショートを仕上げることは可能である。堀本裕樹は又吉直樹の俳句の師匠で、又吉と共著『芸人と俳人』がある。双葉社文芸WEBマガジンで俳句を募集して、堀本裕樹が選び、選評を書く。プロの俳人にとって選句は大事な仕事のひとつである。堀本氏は若い人に人気があるので、読者から363 1句の応募があった。

田丸雅智は東大工学部卒で、ショートショートの旗手として活躍する新鋭。理系の目で俳句を分解再構築し、ショートショートに仕上げた。

たとえば、「花占ひのやうにふぐ刺し食ひにけり」という句。花弁を一枚ずつちぎって「好き、嫌い、好き…」とつぶやきながら花占いをするが、それをふぐ刺しでする。これがショートショートになると、仕事が「うまくいく、うまくいかない、うまくいく…」とパクパク食べる女子が「残り六枚」と気がつく。このまま行けば最後の一枚は「うまくいかない」となってしまう。その瞬間「うまくいくッ」と言って、六枚のフグの刺身を箸で一気に、サァっとさらって口の中へ放り込んだ。と、話のオチをばらしてしまったが、なに、ほかにいっぱい傑作ショートショートがありますから。

泣けるのは「こどもの日浅い水辺を海にして」という句から生まれた「都会のビーチ」。はたして「水辺の海」とはなにか。「逝きし友の家族と賀状続きたる」の句から生まれた「写真の友」には心霊写真家が登場する。堀本裕樹の選評「親友が亡くなったからといって、その周りの縁が切れてしまうわけではない。むしろ深まることがあるだろう」という言葉が深く胸に刺さり、それを体現する使命感に駆られてショートショートが仕上った。堀本（俳句）×田丸（ショートショート）によるエキサイティングマッチ。俳句と小説の格闘はハラハラドキドキです。

「この人に訊け！」本の選者たち（50音順）嵐山光三郎（作家）、池内紀（ドイツ文学者・エッセイスト）、井上章一（国際日本文化研究センター教授）、岩瀬達哉（ノンフィクション作家）、大塚英志（まんが原作者）、香山リカ（精神科医）、川本三郎（評論家）、鴻巣友季子（翻訳家）、関川夏央（作家）、坪内祐三（評論家）、平山周吉（雑文家）、森永卓郎（経済アナリスト）、山内昌之（明治大学特任教授）、与那原恵（ノンフィクションライター）